

## 東京オリンピック・ピアノパラリンピック

### 「五輪停戦」

[UNHEARD NOTES]

NPO 国際障害者ピアノフェスティバル委員会

会長

迫田時雄

1945年（昭和20年）、第2次世界大戦が終わったとき私は 小学（元国民学校）  
2年生でした。

まさに戦争真っ盛りでした。

私が生まれた鹿児島は伝統的に尚武の地として知られ、特に男の子は物心ついた時から  
地域の子として「舎」というところに集められ、主に撃剣の練習をさせられたものだった。

朝早くに集合がかけられるので、眠さに渋っていると、お袋に叱られ、洗面器の水をぶ  
っかけられたこともありました。

戦況もだんだん緊張が高まってきたこともあって、全国からそれはそれはたくさんの兵  
隊さんが集まり、その駐屯地として各学校は兵舎に改装され、子供たちは村の集会所と  
か神社などに分散して授業を受けたものでした。

特に飛行場もまさに沖縄の次に敵軍が上陸するのは薩摩半島ということで、 主なもの  
でも鹿屋、知覧、鴨池、等の特攻基地があり、ずらりと並んだ戦闘機や、訓練の為の離  
着陸の飛行機の飛び交う様は今でも鮮明に覚えている。

また時々土日になると若い予科練のお兄さんたちが市民の家々にホームステイし一時の  
家庭の味を味わせるという軍部の方針でにぎわったものだった。

立派な七つボタンの軍服のお兄さんたちはとても明るく親切で、子供たちとよく遊んで  
くれた。

いつも仲良くしてくれたお兄さんがある日来ない時があった。「あのお兄さんはどうしたの？」と問いかけると「あいつはなあ、爆弾落としに行ってる」とみんなで笑い合っていたことが有った。その後あのお兄さんとは会っていない。

ある日の午後近所の子たちと石蹴り遊びをしていた時、1機のアメリカの偵察機と思われる飛行機が桜島を超えて飛んできた。遊びをやめて眺めていたところ鴨池飛行場から1機の戦闘機が飛び上がっていった。非常な高空だったと思うが、しばらくすると追いついた戦闘機とくるくると回転し遠くから機関銃の音が響いてくるのが聞こえた。お互いの翻る翼がきらきらと輝くのを、子供心にきれいだなと思ったことを覚えている。そのうちどちらかの飛行機からボット黒い煙が出た。僕らは怖くなって近くの藪に逃げ込んだが、しばらくしたらものすごい轟音と両翼から真っ赤な激しい炎をふきながら僕らの頭すれすれに飛行基地へ飛んで行ったのを見た。ゼロ戦だった。

以来ほぼ連日のようにアメリカのグラマンや、コルセアの来襲が激しくなった。飛行場はもちろんついでに打ちまくるように機銃の音が響き、防空壕に隠れた僕らの上にも飛行機が去った後、機銃の葉きょうがたくさん落ちていた。

危険を感じた両親はちょうど僕は1年生になったとき帖佐という祖父母の住んでいた田舎に疎開をした。逃避行といっても狭い鹿児島的事、高々30キロくらいしか離れていない。敵さんは鹿児島市やあちこちに分散して作られた隠れ飛行場や、各地の軍隊の駐屯地へ爆弾や機銃掃射を浴びせて飛び去るのが常だった。

折角疎開していた祖父母の田舎町でも、攻撃にやってきた戦闘機が帰り道に余った爆弾を捨てて帰る飛行機の被害で、遠縁の小城家の一家は一緒に避難していた兵隊さんたちと一緒に防空壕の中で亡くなった。小城家は代々薩摩藩の御典医だった。

ある日村中のサイレンが一斉になり始め、轟々と沢山の敵機が飛んできた。勿論みな防空壕に飛び込んで隠れたが、その後ドンドンとまるで花火大会のような音が響いてきた。鹿児島市への総攻撃だった。

真っ黒い煙が南の鹿児島市の方向で上がり、夜になっても夜空が真っ赤に染まり、3日間くらいそれが続いた。このとき6千人くらいの市民がなくなったと聞いた。

村中の人々が「ウンダモシタン、(なんということだ「鹿児島弁」)」といいながら一日中不安と悲しみの目で見つめていたのが忘れられない。

父は鹿児島市の小学校の音楽の教師をしていたので任地を離れることは出来ず2、3日してから鹿児島から徒歩で僕らの処に帰ってきて、鹿児島が全滅したことを告げてくれた。僕らの無事を確認すると父は直ぐ帰って行った。それから戦闘機の攻撃は止まず、もともと薩摩藩の郷士だった祖父の広い屋敷の庭にカバーをかけられて並べられた機関

銃をあたかも数えるように超低空でたびたび飛んできたものだった。

ある日の午後、伸びきった髪を庭先で母に刈ってもらっていた時の事、突然超低空でグラマンが飛んできた。裏の竹林の竹が風圧で地面を這うほどだった。あわてて母にしがみついてふり帰ったとき僕ははっきりと飛行メガネ越しに僕らを見ていた米兵の目を見た。

恐ろしいものだったが、それはそのまま飛び去って行った。おそらくその後の朝鮮戦争やベトナムなどで繰り返された1シーンと同じだったろうと思う。

今になって思うのだが、なぜ飛行士は銃撃しなかったのだろうか。上空から見たらいくらカバーをかけてカムフラージュされていても、明らかに屋敷の庭に設置された機関銃はわかったはずだ。また駐屯部隊長さんはしょっちゅう祖父の家に遊びに見えて、その間いつも銃剣付の衛兵が玄関や門の前に立っておられたものだった。あの時はたまたま屋敷には僕と母しかいなかった。

驚きでしっかり抱き合っている母子。当時30代後半だった母は気丈で美しい人だった。独身時代ミス鹿児島島の候補に挙げられたこともあったと聞いている。

今になって思えばパイロットはその様子を見て、飛び去って行ったのだと思っている。

兵舎として接收されていた小学校はたくさんの兵隊さんたちがいたが、意外と静かだった。

また校庭にはずらりと並んだ戦車がたくさん見えた。おそらく決戦が近いということで機を持しておられたのだと思う。

ある日ひらひらと飛んできた紙切れに「広島に 新型爆弾おとさる。」と書かれていて、村中の人々が不安そうにそれを回し読みしているところを見た。

しばらくして当時3年生だった兄がお昼過ぎに学校から帰ってきて“日本が負けたんだって”といった。そうしたら、それを聞いた祖父が烈火のごとく怒った。

本当に怖かった。

その後、村の重だつた人びとが集まってきて相談が始まった。

敵が上陸してきたら徹底抗戦。祖父たちは立派な刀を持っていた。ないものは竹を切りその先を火で焼けば刃物のように使える・・・と行って竹を集める。

祖父は村人と一緒に奥地の山裾に竹を組んだ即席の小屋を作り、女子供の避難所を作った。暴行から守るとはっきり言っていた。

村にあった備蓄米を全部はたいてそれぞれの家族分を持っていかせた。

心細くなったので母に「僕らはどうなるの？」と聞いたら、「捕まったらみんなアメリカの奴隷になる。だから戦うんだ。」と皆の緊張はただ事ではなかった。

そのご 1週間ほど何もなく、むしろ静かな日が続いてそれぞれ自分の家に帰ることに成った。父もしばらくしてやってきて、鹿児島は全滅だ、幸か不幸か家は無事だった、ただ家を焼かれた人びとが住み込んでおられる。家主として早く帰った方がよからう・・・ということで、9月の新学期に間に合うように自宅に戻った。すっかり様変わりした街並みというより、がれきの山をすり抜けるようにして走る引越トラックの荷台から眺めながら、大好きだった予科練のお兄さんたちはどうなっただろうと思っていた。

1年前、海岸沿いの国道を最後尾が見えないくらいたくさんの海軍さんたちが、鴨池航空隊の基地に戻るのに2列縦隊できちんと歩調を取り、「予科練の歌」を大声で歌って行進しておられた姿を思い出していた。又錦江湾を眺めながら驚いた。以前は様々な軍艦がずらりと並んでいたものだったが、いま目の前に浮かんでいる軍艦はみな砲塔がなくなっていたのだ。さびしそうに静かに浮かんでいる船船が泣いているように見えた。その後たびたび沖縄の顛末を知る中で、一つ間違えれば私も生きておれなかったかもしれないとおもった。

戦争が終わって、待ち構えていたのは食糧難と物価高だった。先ず電車賃が「銭」単位だったのがアツという間に「円」になり、お札の大きさも名刺くらいだったのがだんだんと今のものになっていった。食料もすべて配給制、衣料なども切符制それも十分いきわたるとは限らなかった。たまにクラスで靴が1足配給があつたが、古い自動車のタイヤのゴムを鋳直して成型しただけのものだったから使い物にならなかった。

町が一変したのは 白いガウンを着て赤十字の腕章をつけ目抜き道りに並んだ傷痕軍人さんたちだった。目の不自由なひと、松葉杖の人、莫藎の上に座った下半身の無い方、そしてアコーディオンやハーモニカでかつての軍歌を一日中演奏し、無言で座っておられた。今でもあの方々の地獄の生き様は想像を超える。その後どうなさったのだろう。

私の父はヴァイオリニストだった。兄弟が多かったのでお金のかからない師範学校で学び学校教師になった。その中で音楽の才能を発揮し、ヴァイオリンやピアノを巧みに演奏した。学生時代いわゆるピアノ教則本「バイエル」は 3か月で終えたとよく自慢していた。多才な人で、教師として最初の赴任地では子供たちの為に素敵な曲を作曲、皆で歌わせて評判になったと聞いている。

ところが戦況が激しくなり軍国主義が強くなる中で欧米の歌舞音曲への偏見も強くなり活動できなくなっていた。

応接間で練習していると、隣家の昔、庄屋さんだったというH氏は、おもむろに障子をあげっぱなしにして薩摩琵琶を取り出し、声高に「べんせいしゅくしゅく〜〜〜」と、これ見よがしに始めたものだった。父は苦笑いしながらヴァイオリンを静かにケースに収めていた。

戦争が終わって、しばらくするとどっと米兵がやってきた。ほんの先まで敵兵であったから、国民の警戒心は激しいもので、米兵の姿が見えたらあわてて隠れたものだった。ところが父はがぜん毎日うれしそうにヴァイオリンを練習するようになった。まだ小学二年生だった僕にピアノ伴奏を弾かせた。まだ楽譜がよく読めなかったから、直接鍵盤で覚えこませ、いきなりアンサンブルが始まるという方法で、様々な父のレパートリーを覚えさせられたものだった。

意気消沈してまさにさまよえる民になっている人々の中で、やはり食べるものに事欠く生活からニーズに応えるかのように、米兵相手の女性がいち早く表れるようになった。これはみんなに大きなショックをあたえたけれど、これはやはり日本が本当に戦争に負けたのだということをつかせることに成ったと思う。町中、特に「天文館」という繁華街ではげげげしい身なりをした若い女性たちが、今まで敵性国といわれていた相手の腕にしがみつき媚を売るありさまに見てはならないものを見てしまったと思った。

ある日の事いつものように 応接間で父と練習をしていた時のこと、多分音を聞きつけたのだと思うが、通りの向こうからそういった女性を伴った若い米兵がこちらへやってくるのが見えた。

私は恐怖を覚え、必死で父の腕を抑え奥の方へ隠れるように押し込んだ。父は「わかったわかった！」というような困った顔をしていた。

父は大正・昭和のロマンあふれる時代に多感な青少年時代を過ごし音楽家を目指して勉強をしていた。またヨーロッパ文化のことはそれなりによく知っていたはずだ。

しかし私が国民学校に入って真っ先に教わったのは「鬼畜米英」。

「アメリカ人は真っ赤な顔をして鬼のように角がはえているの？」と真顔で聞いて母を困らせたことを覚えている

戦後我が国は「軍国主義国家」を脱皮し、「民主国家」として生まれ変わることに成った。「新憲法」も発布されすべての体制がガラッと変わってきた。

父は音楽家として見直されたのか教育委員会の指導主事として委任され、県内の小中学

校や 青年会、指導会や、様々なイベントの開催に携わるようになった。  
ほとんど連日県内の様々な学校や集会場に出かけていき、まさに席の暖まる時がなくなっていた。

父の人気の秘密は一丁のヴァイオリンだった。ところが戦争のどさくさの後の事、ピアノを弾ける人はいない。幸か不幸か、父のレパートリーのほとんどを覚えている僕にお鉢が回ってきた。 当時どこに行っても貧しく、ほとんど何もなかったが、そういうわけで特別ということで、ご飯やイモで作った羊羹とか、心づくしのおもてなしが有ったので、小学生には有りがたかった。

しかし、それが何年も続くと、さすがに気が重くなってくる。学校から帰ってきて角を曲がると、市役所から差し回しの黒塗りの車が待っているのが見える。木陰に隠れていると父が探しに来てそのまま強引に車に引っ張り込まれて会場へ連れて行かれたことも時々あった。

然し今になって思うと、そのおかげでどんな楽譜でも初見で弾けるようになったし、伴奏でソリストがどんなことが有っても一緒にカバーして演奏できるようになった。また頭の中で様々な音の組み合わせを楽しめるのはこうした父の采配のおかげだと思っている。

行った先々で呼びかけていた父の言葉は、

「心に太陽を持て！

唇に歌をもて！」

という言葉だった。

又父の大好きな曲は、 ベートーベン作曲のヴァイオリンソナタ「春」だった。

後年私が武蔵野音大の助手になって、ある年の正月に久しぶりで家族みんなが集まったとき、僕の提案で「久々にリサイタルをやろう。この「春」を弾きたいね・・・」と約束をした3か月後に。急に亡くなった。57歳で亡くなった。

あの残酷な時を経験したこの年代の人々にとって、ここまで生きながらえるのが精いっぱいだったのだろうと思う。

さて、こうした中である時少年雑誌で、古代オリンピックの記事を読んだ。

古代オリンピックは 1000年以上に渉って4年ごとに一遍もかけることなく開かれた。これは残酷な戦乱に明け暮れる中で、救いを求めた人々が「ゼウス」神の基に集い、祈りをささげたのが始まりで、4年ごとに定期的に繰り返し開かれた。祭事としてすべての人が参加するために、その期間は 一切の戦ごとをしないと申し合わせ、それを1

200年間きちんと守ったとあった。私はショックとともに古代の人々に深い畏敬の念を覚えた。

私は戦争はただ単に鉄砲をドンパチ打ち合うことだけではなく、普通の人々の心まで変えてしまうのだというのを見てきたからだ。

まだ戦中はよかったと思う。

ある時町中に外出禁止令が出た時がある。鴨池航空隊の予科練の兵隊さんたちが市街戦の実習訓練をするということだった。夕闇の薄暗がりの中若い兵隊さんたちが声をかけあいながら全力で走り回っていた。しばらくして近くの堀ドンのお屋敷からおおきな怒声が聞こえてきた。

僕は好奇心の塊で家を飛び出していった。そこには門の内側に隠れていた若い男女が引きずれ出され、畑になっていた大きな茄子でぶん殴られているところだった。

たまたまデイト中で、軍の訓練をしらないで隠れたのだと思う。「この非常時になんだ・・・」という声と。バシバシと殴る音が聞こえる中で、「よし 明日航空隊に出頭しろ」「はい」という声が聞こえた。 みんな同じ年頃のお兄さんたちだった。

しかし今になって思えば いい意味でみんな使命感であふれていたのだけはなつかしく思い出される。

問題は戦争が終わってからだった。

みんな食料の確保に必死だった。特に僕たち家族は男3人兄弟に、まだ生まれて間もない乳飲み子の妹、戦後のショックもあったのだろう母はほとんど母乳が出なくなった。いつも妹は泣いてばかりいた。ヤギ乳の販売があると聞いて一升瓶をもって飛んでいき長いこと待たされてほんの1っ回分くらいしか手に入らないこともしょっちゅうだった。

不幸中の幸いというか南国鹿児島はサツマイモはよく取れた。芋の弦を埋めておくとそこからドンドン芋が育ってくる。父は せっせと庭を掘り返して芋を植えた。また鹿児島は伝統的に堀の代わりに 細い竹垣を植えるが、これも若芽は食べられた。

まだ祖父のところに疎開していたとき屋敷の裏にはこんもりした孟宗だけの林があった。季節になると土の中からはよきによきとタケノコが顔を出してくる。ある時弟とそれを見て、もっと早く育つようにしようと二人でせっせとタケノコの皮をはいだことがある。ところが1週間もしないうちにそれが しなびて腐ってしまった。それを祖父に見つけてカンカンに怒られ、弟は竹に縛り付けられ許してもらえなかった。おじいちゃんは本当に怖い人だった。母が手をついて謝ってくれたので助かったが。

ある時みんなで夕食を食べていた時だった。突然お隣のおばさんが訪ねてきた。そしてお宅ではちやんとご飯を食べている。田舎があるから何とか食料が手に入るのだろう。うちはそんなものも無くてほとんど困っている。少しくらい分けてもらえないかと茶碗を持ってこられた。応対に出た母もこちらも子供も多いし食べるものも日々やりくりで困っていることをる述べていたが、おばさんはどんどん声高になりいつもの優しいおばさんの変わりように恐ろしくなったこともあった。

父は夜寝るときにいつも自分の服を枕元にたたんで寝ていたが、あくる朝それがなくなっていた。

驚いて調べたら裏玄関が少し空いている。どうやら音がしないように引き戸の下に小便をかけて忍び込み、もっていったようだ。

ある時は僕が学校から帰ってしばらく休んでいたとき時、何気なく玄関の方を見たら少し空いている硝子戸の間から竹の棒が入ってきてまさに父の靴をひっかけようとしていた。夕暮れが近いからとはいえ白昼堂々とありえないことがおこることは恐ろしいことだった。僕は驚いて大声を出した。

そして母と一緒に駅前の交番に行った。当時はまだお巡りさんは腰にサーベルを下げ、いかめしい顔をしておられたが、なんとたくさんの人で交番も一杯、被害届を書いて帰るだけだった。

終戦の前まで疎開していた帖佐の町の真ん中を、別府川という大きな川が流れていた。その河原で、まさに帖佐国民学校に駐屯しておられた沢山の陸軍の兵隊さんたちが、良く訓練しておられたのを見に行った。

鹿児島市では、ほぼ航空隊の明るい若い人たちが中心だったが、陸軍の兵隊さんたちはぜんぜん違った。

少し年齢的にも高かったし、お互い住民とも含めて談笑したりすることはなかった。

河原での訓練では、藁で作られた案山子人形をたてに、沢山の兵隊さんたちが一列に並び、隊長の命令1下、一人ずつ駆けていって銃剣でグサッと突き刺していた。

ただ隊長さんはそのやり方が気にいいらないのか、大声で怒鳴り、それを神妙に受け止めておられた兵隊さんたちの緊張した顔が今でも思い出される。

戦後、戦地から帰還兵として、兵隊さんたちが帰国され始めた。

さらに満州や中国、朝鮮から引揚者として子供ずれの家族がどんどん増え、小学校のクラスいっぱいになっていった。

陸軍上等兵として立派な軍服と軍刀を下げて出征の挨拶に来た中園の叔父は帰ってこな



かった。 南方の戦地で、切り込み隊の隊長として作戦中、亡くなったとの噂を聞いた。

帰還兵の皆さんで共通しているのは、皆さん現地ではどういうことがあったか、ということほとんど話されなかったことだ。

鉄砲を撃てば人に当たる。そして何人殺したかは本人が一番良く知っているのだ。それは戦争だったとは云え、しかしその事実は永遠に心の傷として残るのだから。

古代の人々も同じ思いだったのだろう。 いやむしろ古代は肉弾戦が中心だからもっとひどかっただろう。 亡くなった人たち、そして已む終えず自分が死に追いやった人々への弔いと祈りの場、そして許しと癒しの場として始められたのが、まさに「オリンピック」だったのだと聞いている。

そして「オリンピック」の祭典に先立ち、ギリシャ全土に使者が立ち、この祭典の期間中は戦ごとはしないと申し合わせをし、なんとそれは1169年間守られたという。

人間だけが持つ、本能としての信仰心のなせる業の見事さには深い感動を覚える。

もちろんお祭りだから、厳粛な祈りの儀式があり、神への賛美があり、人々の生きるための「人生哲学」の説き証があり、当然 音楽、奉納としての歌舞音曲があったに違いない。

もっとも印象的なのは、今日のオペラの原点とも言われる、ギリシャ悲劇の数々だろう。

自分たちの言い伝えの中でのさまざまな悲しみのドラマの、真に迫った演技に、感動した会衆の泣き声が、コロシアムの外まで聞こえたという。

そうして祭りの締めくくりとして、レスリングや、徒競走、ボクシングなどで盛り上がるのは、今日でも、京都、福岡、青森、徳島、あるいは世界各地の祭りで見られるとおりで。

もちろん当時のギリシャと今日の規模は比べ物にならないし、また近代オリンピックの歴史も せいぜい100年目だ。

しかし今日では「オリンピック」の持つ「平和の祭典」としての意義は、かなり市民権を得てきているし、今後の人類の発展に寄与できる何物かをもっていることに

みなうすうす気がつき始めていると思う。

しかし「古代オリンピック」と現代のものとの大きな違いは、まさにこの「不戦の誓い」である。

オリンピックこそ未来の人類をひとつに結びつける力を持っているし、その願いに人々はきずき始めているが、果たして今後これを千年2千年以上の祭典に残せられるかというといかがなものだろう。

まず、今回「東京オリンピック」開催にこぎつけたことはまことは目出度いことだ。しかしいざ蓋を開けてみると、改めて宿題の多さに驚かされている。

まず予算規模のうなぎのぼりのふくらみだ。 また獲得のメダル騒ぎだ。

オリンピック憲章ははっきりと「スポーツと文化と教育の融合である」と謳いながら、一部の筋肉マンによる勝敗や、記録づくりに一喜一憂してしまっている。

一方オリンピックの経済効果は5兆円と煽り立てる一方、かかる経費の巨大化にもう今後開催国として名乗り出るところは無くなるだろうという声も聞く。

またメダルに拘泥するあまり、深刻なドーピング問題でオリンピックそのものの存亡か危ぶまれてきている。

私が1985年、当時の東ドイツの教育文化交流交換研究員で ドイツ・ライプツィヒに居たとき「メダリストたちが将来子供を生むのを怖がっている・・・」

といううわさをたびたび聞いた。

当時陸上部門の金メダルは東独が独り占めして居たものだ。

今ではイデオロギーのプロパガンダとしてそろそろ化けの皮がはげてきた感があるが、さらに火をつけているのが21世紀になってから急に顕著になったテロ問題だ。

テロ問題対策費だけで1500億円かかると噂される。

この費用で新しい競技場ができる。

しかしオリンピックのもつ意味は単なるイベントの一つではなく、深い意味を持つことに気付くべきところに来ていると思う。

古代の原動力は「ゼウス」信仰であり、罰が当たらないように 戦をやめたのだ。

では現代は？

残念ながら 現代は ゼウスに代わるものをまだ見つけていない。

しかし、まづ「五輪休戦」から始めたいと思う。

IOC「国際オリンピック委員会」は1990年代からこの問題に取り組み始められたことを知っている。

しかしこういう問題はもっと底辺の「草の根運動取り組み」、そう、「オリンピックでは戦争をしてはいけないのだ」・・という常識を育てるカリキュラムを、オリンピックの選手（才能教育）を育てると同時に全世界の教科書に取り組むことだと思う。

こういう運動を打ち出せるのは、日本こそ絶好の国である。  
チャンスが来たと思っている。

- \* 徹底的に戦争責任を問われ、当初再生不能と信じられた国。
- \* 憲法で「戦争放棄」に踏み切ったとき「武器を持たないで、どうやって自分を守るんだ」と世界中から嘲笑された国。
- \* しかし無から再出発して、立派に成長した国。
- \* 日本は戦後70年誰一人戦死者を出していない。
- \* 人類自滅の引き金になる原爆の直接の被爆国・生き証人。人類はすでに「パンドラ」の箱を開けてしまったのです。

オリンピック参加国全員で「不戦の誓い」を確認し、国連にもう一度働きかけましょう。

人間の宿命にかかわる「パラリンピック」こそはっきり主張する権利と義務があると思います。

みんながそれぞれ持てる得意を持ち寄って賛美する「人類の祭典」に！

オリンピックはそれほどの 価値のあるものです。